便座の謎―旧ソ連トイレ事情

岡　奈津子

旧ソ連のトイレには便座がない、という話を聞かれた方は多いのではないだろうか。ソ連時代も、各家庭やホテルなどのトイレには便座はついていたから、便器に直接座る習慣があったとか、足腰が強くて中腰でも平気だとか、そもそも生産されていなかったというわけではない。残念ながら、なぜないのかは私にとっていまだに謎である。

ソ連が崩壊して一四年が経過した現在、都市部ではトイレ事情も変わりつつある。しかし、大学や図書館といった公共機関をはじめとして、いまだに便座のないトイレもたくさんある。中央アジアでたまに見かける和式なら問題ないのだが、便座のない洋式トイレは座るのもしゃがむのも難しい。こういうときは、座る回数がずっと少ない男性がうらやましくなる。

それでは、どうするのか。尾籠な話で恐縮だが、私は、たいていの女性がそうしているように（目撃したわけではなく、靴あとからわかるのだ）、便器の上に足を乗せてしゃがむ方式をとっている。幅が狭くて滑りやすく、ヒールのある靴を履いているときなど、これはけっこうな難行だ。しかも、荷物をひっかけるフックや置き場所がないので、書類でふくれた重いカバンを肩にかけつつ、うまくバランスをとらなければならない。さらに、ドアに鍵がかからないときは、その不安定な体勢を片手で支え、もう一方の手でドアを押さえるのである。ちなみに、私と同じく中央アジアをフィールドとする同業者の日本人女性はかつて、雨が降り注ぐ夜、天井に穴の空いた電気のないトイレに入り、上記の体勢でさらに傘をさしながら、口に懐中電灯をくわえて用を足したそうだ。

ソ連のトイレと言えば、トイレットペーパーの固さも有名だったが、昔も今も公共トイレではまったくないか、あっても有料だ。私がモスクワに留学していた一九九〇～一九九一年はモノ不足がピークに達した時期で、トイレットペーパーの代わりに新聞紙や紙切れがよく置かれていた。そもそもこれらの代替物は使い心地が悪く、しかも当時の紙は悪質で、はさみでも簡単には切れそうにないほどごわごわしていた。現地の友人たちは、「ソ連人はオシリが固いから大丈夫」と自嘲気味に言ったものだ。

モスクワ滞在中、トイレットペーパーをいかに調達するかは死活問題の一つであった。私は時折、外国人向けのホテルに忍び込み（入り口に警備員がいて、ソ連人は理由もなく入ることはできなかった）、そこのトイレの紙を頂戴した。とはいっても、敵もさるもの、ペーパーが外れないように頑丈な鍵で固定してある。そのため、くるくるっと巻き取り、これで数日はもつかな、という程度の量を持ち帰るのだ。最近、その時期に留学経験のあるアメリカ人の知人（ちなみに男性である）と当時の思い出話をしていたら、やはり私と同じことをやっていたと聞いて笑ってしまった。

旧ソ連諸国の田舎や郊外では、いまでも地面に穴を掘り、そこに掘っ立て小屋を建てただけのトイレが普通である。悪臭は避けられないが、少なくとも無理な姿勢をとる必要はない。思えば私自身、くみ取り便所が当たり前だった地域で育った。体の小さい小学校低学年の頃は、学校のトイレが怖かった。同級生のおじいちゃんが穴に落ちて死んだとか、下から手が出てくるなどという噂があって、恐怖におびえたものだ。そんなわけで、くみ取り式トイレ（といっても、あちらでは満杯になったら別の場所に作り直す方式が多いと思うが）には若干の郷愁を覚えなくもない。しかし、使うのはやっぱり便座付きの、清潔な水洗トイレがいい。最近、そんな風に思う自分を、軟弱になったと自己批判している。

（おか　なつこ／アジア経済研究所地域研究センター）